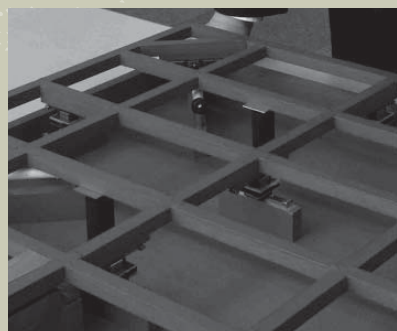


職人の技

シリーズ②②（免震システム品質管理）

THK 株

村尾 秀己 さん



地震国・日本。阪神・淡

路大震災以来、毎年のように大きな地震が日本を襲っている。その中で、命、財産を守るさまざまな取り組みが行われている。ビルや住宅に取り入れられている免震システムもその一つだ。THK（株）は自社が持つ技術を活用した免震システムを世に送り出しているが、この命、財産を守る製品の開発・製造・品質管理を担う重責にあるのが、村尾さんである。

● 村尾さんは免震システムの品質管理について、こう切り出した。「もしかしたら一生使われないほうがいいのかもしれない。私たちが品質管理に全力投球する免震システムはそういう製品なんです」

そう、免震システムは、震度5以上の大地震に対して特に効果を発揮する。自動車のエアバッグや飛行機の緊急避難用具と同様、使わないで済むというのが一番だ。もしもの時に確実に機能させることが必須。だからこそ、品質管理は難しい。

「THKでは、工作機械や半導体製造装置などに欠かせない直線運動案内装置の開発や製造もしています。これは良くも悪くもすぐに品質管理の結果が出ます。だから、すぐに改善もできます。しかし免震システムは、本当に問

題がないのかという答えが出るのは地震のとき。そこで命、財産を守れなければ、何だったのかということになります」

答えのない戦い、ゴールが見えない戦いほど、目標や士気を失わせるものはない。そして、ことが起こるまでは誰からも評価されることはない。

「建物ができてしまえば、土台や壁の中にある装置は誰の目にも触れません。それでも品質管理の努力を続けます」
努力の源は「ものづくり」のプライドだ。プロセス管理やQC活動などの取り組みは、村尾さん率いるチームも当然

行っているが、最後にものをいふのは仕組みではなく、命を守る製品を世に送り出しているという自覚とプライド。

そして最後は、職人としての心、です。品質管理における、その心とは何か？ それは『本質は何かと問いかけながら考える』、ということではないでしょうか。お客様が求めていることが基準ではなく、お客様が気付かないことに気がつき、それ以上の品質にするのが我々の努めです」

免震システムの製造、管理にかかわる一人ひとりがこの気持ちで一丸となっているという。

第三者機関の検証、データ、構造設計と合わせ、十分な品質基準は満たしている。国の認証を受けなければ引渡しもできないため納品された製品に問題は無い。しかし、職人たちは満足しない。

「物理的に安全であることは当たり前のことです。その上で私たちは安心を提供しなければいけないのです」

導入したことによって日々の暮らし、経済活動を安心して行っていたり、食の安全、建築の偽装などに関心が集まる時代だからこそ、安心して使っていたらいい。そこまで一人ひとりの職人たちが考えて

誰の目にも触れなくても、品質管理の努力を続けていく。

文=岩瀬大二
text: Daiji Iwase

写真=北原幸児
photo: Kouji Kitahara



こそ真の品質管理。村尾さんは、たとえすぐに評価が得られなくても愚直に安心を提供するために何をなすべきかを考え続ける。

ここで村尾さんの話題は、江戸・安政の大地震や300年前の東南海地震の

歴史から、プレート型地震と断層型地震の違い、そして地震にかかわる建築関連の法律などへと変わった。地震を専門に研究している学者ではないかと思うほどの淀みない解説と豊富な知識。

「もし関東から東海にかけて

の広い範囲で地震がきたら…。そのときに我々の免震システムが人命、経済活動をいかに守れるのか。いつも考えています」

インタビュ어가終わりふと会議室の壁を見ると、THK社長長方針が貼られていた。そこには「最高品質の徹底追求」と

力強く記されていた。それを見て村尾さんは微笑んだ。

「終わりはないんです。1回のミスで何十年の積み重ねが一瞬でダメになる。だからこそ、自分で考えていかなければいけない」

PROFILE

むらお・ひでみ

1953年北海道生まれ。千葉工業大学を卒業し1985年THK株式会社、東京支店配属後、1990年宇都宮営業所、営業所長着任。このときから時代に先駆けて免震に着目し取り組みを始める。1995年の阪神・淡路大震災以降、地震対策として免震システムの採用が始まると免震への取り組みを社内で行く。2001年、免震をはじめとする新規開発分野を担うACE事業部発足と同時に、免震への長いかわりを買われ、初代事業部長に就任。